The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈移動〉が紡ぐ世界 : フィールドとテクストの架橋にむけて : 第2回・東西若手研究者交流シンポジウム報告
Author(s)	猪岡, 叶英; 栗山, 新也; 西田, 桐子 他
Citation	日本学報. 2018, 37, p. 87-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71624
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【対話と方法】

〈移動〉が紡ぐ世界 ―フィールドとテクストの架橋にむけて―

第２回・東西若手研究者交流シンポジウム 報告

報告：猪岡叶英、栗山新也、西田桐子
冨永真樹、番匠建一
記録：ファクンド・ガラシーノ

2017年7月29日、第2回・東西若手研究者交流シンポジウム「〈移動〉が紡ぐ世界――フィールドとテクストの架橋にむけて」が大阪大学豊中キャンパスで開催された。本稿は、このシンポジウムで行われた報告と議論を振り返った活動報告である。以下では、まずシンポジウム開催の経緯と趣旨を確認して、当日行われた個別の研究報告を概観した後、報告に対するコメントや全体討論で提起された主要な論点を紹介する。

1）シンポジウム開催の経緯と趣旨

東西若手研究者交流シンポジウムとは、大阪大学、慶應義塾大学、國學院大學、立教大学や東京大学の大学院生と若手研究者が中心となり、異なるディシプリンと方法論に触れることによって新たな研究の視座に出会うとともに、学際的な研究ネットワークを構築することなどを目的に始まった研究会である。もっとも、この研究会に集まる参加者は、議論の対象となる問題に関してあらかじめ共通理解を図っていなかったことを、まず明記しておく必要がある。ただし、そこで、専門が異なる者が敢えて議論の場を共有し、その現場で多彩な課題をともに模索することによって、これからの人文学の可能性を探ることこそが、このような学際的な本研究会の意義と考えられる。

第2回となったこのシンポジウムでは、共同の議論の土台を作るべく「移動」に着目した。移動（mobility）という問題を社会科学や人文学の考察の中心にすえるアプローチは、文化人類学や社会学の文脈で最初に提起され、定住性、安定的で充実した意味、連続性、そして明確な境界を持つ場所への帰属を特権化し、さらには同質性を欲望する想像力への徹底的な批判に取り組んだ（Urry 2000、Sheller and Urry 2006、伊豫谷 2013）。このような問題意識の背景には、冷戦構造の解体を画期として、国境を越える労働者の移動が益々活発になり、資本や情報のネットワークが複数の地域や国家を横断しながらどれか一

つだけに拘束されずに浸透していく状況の顕在化があるだろう。このシンポジウムでは、人文学の多彩な課題を照らし得るカテゴリーとして、移動を軸に議論の場を開くことにした。

ただし、移動というカテゴリーの含蓄は極めて複雑で多様であるため、このシンポジウムでは、移動に関する統一見解ないし提言をまとめることを目的としていない。現に、移動の活発化は差別的な監視や管理と並行してきた。一方で移動に対する障害を撤廃されるものもいれば、他方で移動を制限され阻止されるもの、または居場所を奪われて移動を余儀なくされるものもいるだろう。このような状況は、現在進行形のグローバルな難民問題に照らしても明らかである。さらに言えば、「越境」という用語で論じられてきたように、人々やモノがある境界を横切ることによって、その境界が輪郭付ける空間の支配的な論理に抵抗して、空間の秩序を相対化したうえで、新たな論理に基づいた空間を出現させることもある。反対に、植民地状況における支配者の移動のように、移動が既存の構造を変えず、むしろ再生産される場合もあるだろう。このように、移動という視座が照らし出す問題の幅広い範囲が明らかになったが、学際的な研究会である本シンポジウムでは、報告者や一般の参加者をも含めて、それぞれの問題意識と視点を突き合わせつつ課題を共有し、参加者のさらなる研究の発展に資することに徹した。

2）報告について

研究会では、まず猪岡叶英（大阪大学大学院）、栗山新也（国際日本文化研究センター）、西田桐子（工学院大学非常勤講師）、冨永真樹（慶應義塾大学大学院）、番匠建一（同志社大学＜奄美・琉球・沖縄＞研究センター研究員）が、移動という観点から自らの研究に関して個別の報告を行った。そしてこれらの報告を受けて、辛島理人（神戸大学）にコメントをいただいた。なお、当日の総合司会は、茂木謙之介（日本学術振興会）にお願いした。以下では、各報告を概観した上で、コメントや総合討論について述べたい。なお、本報告における肩書はすべて研究会開催時のものである。

猪岡報告

まず、猪岡叶英が「祖先祭祀の継承過程にみる沖縄と大阪の往還関係」と題して、大阪に住む沖縄出身者と、出身地域の親戚との関係性に着目し、両者の関係が祖先祭祀の継承を通じてどのように語られてきたかを報告した。その際、フィルドワークや聞き取りという方法を通して、両者の認識の相違とずれに焦点を当てることから、祖先祭祀の継承を通じた大阪と沖縄の往還関係を検討した。猪岡の報告は、人々の語りや言葉というオーラリ

ティを根拠としつつ、主として出稼ぎや移住という形での沖縄から大阪への人とモノの移動が祖先祭祀という実践においてどのような文化的・政治的な意味を帯びるのか、という問いを発するものであったといえる。

報告を通して猪岡は、位牌や仏壇など祖先を象徴するモノの移動の軌跡を追い、これらを迎えた大阪の沖縄にルーツを持つ家族からの聞き取りを引き合いに出しながら、沖縄出身の家族が位牌や仏壇を継承した背景と経緯、そして大阪に位牌や仏壇が移動した後の状況という三段階の分析を行った。位牌や仏壇が大阪へ移動することになった背景としては、父系血筋の男性（長男）がこれらを継承しなければならないとする沖縄における祖先祭祀のルールや女性による位牌・仏壇の継承を禁止するタブー事項の存在があった。継承の具体的な経緯はここで省略するが、重要なのは、大阪に在住する家族の視点から位牌・仏壇を受け入れる際に、沖縄側の親戚と複雑な交渉が行われ、大阪側と沖縄側とでは継承の受け止め方をめぐって異なる語りをしている、ということである。

この作業を通して、モノの移動を媒介にした祖先祭祀の継承という「民俗文化の移動」は、沖縄と大阪の往還運動を促し、沖縄出身者と出身地域との関係性を維持させるだけではなく、若い世代の参加を通して親戚関係の再考を促し、関係性の変容をもたらす側面があることが明らかにされた。

栗山報告

栗山新也は「三線の移動と積み重なる価値―大阪、ハワイの事例をもとに」という報告で、沖縄、大阪とハワイを対象にして、三つの地域を行き交う三線への注目から、三線はどのような人間関係のなかでやり取りされてきたのか、さらには一丁の三線をめぐってどのような価値が付与され、積み重ねられたかを論じた。三線とは、沖縄に伝わる蛇の皮を張った弦楽器であり、主として沖縄の古典音楽、民謡やポップの演奏に使用される。持ち運びが簡便であることから、20世紀における出稼ぎや移民という沖縄の人々の移動とともに、国家や地域の境界を越えて、ハワイ、フィリピン、南北アメリカや日本本土、ミクロネシアなどに多数運ばれた。そこで本報告においては、社会関係生成の媒介としての三線の役割や機能が論じられたとともに、三線の価値を固定されたものではなく、継承の過程において多様な価値や感情が積み重なって形成されることが強調された。

最初に、栗山は移民とともにかつてハワイに渡り、そこからから沖縄に戻ってきた、いわゆる「里帰り」三線に着目した。移民がハワイに持ち込んだ三線が沖縄に帰還するまでの過程をたどってみると、三線は親族や師弟といった関係のなかでやり取りされており、そこでは同じ一丁の三線をめぐって文化財的価値、楽器としての実用性、珍しさ、形見の品などの多様な価値が付与されていったのである。大阪で継承されている三線も演奏用の

楽器としてだけでなく、お礼や感謝の意が込められたモノ、記念品、誰それが演奏した、形見の品などの価値基準が存在した。さらに三線が人から人へと渡ることによって、楽器としての実用的価値から記念品的価値、関係性の象徴的価値へと価値付けが推移する事例がみられた。

この報告を通して、三線の価値は、固定的で一義的なものではなく、継承の過程で推移し、積み重なっていくものであることが明らかになった。形見の品、誰々から譲り受けた三線といったように、三線が持つ関係の象徴的価値は、どの事例の所有者においても重要視されていたが、そこからは、長期にわたって三線を継承してきた人々の関係の連なりの蓄積がうかがえ、過去に三線を継承してきた人々の関係を想像させる媒体として機能していたことが明示された。このように三線が人から人へ、地域を越えて渡っていく際に積み重なった人間関係の「履歴」こそが、楽器としての実用性よりも重視されるところに、楽器として、あるいはモノとしての三線の特徴が現れている。

西田報告

西田桐子は、「テクストの越境、もしくは転移―『アンクル・トムの小屋』の翻訳を中心に」という題名で報告した。西田は、ハリエット・ビーチャー・ストウ著『アンクル・トムの小屋』（Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*, 1852）という英語のテクストに着目し、このテクストが日本社会に受容される文化的プロセスを、とりわけ翻訳というプロセスを通して検討した。西田は、幾人かの翻訳者に焦点を当てるとともに、文学テクストの翻訳を「増殖」や「転移」という言葉を通して捉えることを提案しつつ、ホミ・K・バーバの「文化翻訳」やイーヴン・ゾウハーによる文学的多元システム論を手がかりとして、『アンクル・トムの小屋』の日本における翻訳／受容に関する史的考察を行った。この作業を通して西田は、多元的な文学的システムにおける翻訳の流動的で可変的な位置を歴史的に探りつつ、文学テクストの翻訳が、複数の位相における移動を含みこんで成立する営為として捉え直すことを可能にさせることを指摘するに留まらず、さらには、言語だけではなく、国家、地域や文化の壁を越えるテクストの越境性をも明らかにした。

悲劇の黒人奴隷トムを描く『アンクル・トムの小屋』は、奴隷制廃止運動に拍車をかけ南北戦争の引き金となったといわれるほど、米国国内でも大きな反響を呼んだ小説である。この作品の複数の日本語訳を、医学用語である「転移」のイメージに沿ってとらえたうえで、上述したバーバやゾウハーの翻訳理論を踏まえて読むことを西田は提案したのである。そうすることによって、医学用語としての「転移」のイメージから想起されるように、文学作品の翻訳を、テクストが書かれた場所から別の場所へ移り、そこで増殖して、様々な

ヴァリエーションを持った複数の新たなテクストを生み出していくプロセスとして、さらには文学テクストが多様な文体のなかで組み直され、独自の文脈を持つメディアに掲載され、複数のジャンルの中で再構成される過程として提示した。このように、ヴァリエーションを持った複数の翻訳テクストが成立して、さらにはそれらが別の作品のなかで引用されることで新しいテクストの一部となる。そして、複数の翻訳テクストが互いに共鳴しつつさらなるテクストの増殖を促す。上記の作業に照らして、言語、地域、文化、メディアやジャンル、さらには時代など複数の境界を越える翻訳の越境性が浮かび上がった。

富永報告

富永真樹は「移動が生む怪異―泉鏡花作品を中心に」として、明治期から昭和にかけて長く活躍し続けた作家・泉鏡花（1873-1939）の小説作品を対象に、作品中に描かれる移動のあり方から生み出される怪異と幻想の内実を論じた。泉鏡花は、幻想や異世界、妖怪や幽霊と言った題材を好んで書き続け、熱心な読者を獲得した一方、このような題材を扱うことから前近代的な作家として評され、かつ同時代の文壇と社会からは隔絶された存在として位置付けられてきた。しかし、明治期以来の近代化を経て、人々の移動のあり方が大きく変化していく時代の中で鏡花作品を読み直してみると、そこに描かれる幻想、異世界や怪異への想像力は、作家が生きた時代における、鉄道という新しい移動と旅に媒介されたものであることに気づく。

代表作の『高野聖』で描かれる飛騨のように、鏡花は実際に訪れた地、人から伝え聞いた地、あるいは幼い日々を過ごした故郷といった多様な土地を作品の舞台として描いたが、作品の中でも多くの場合は、その土地を訪れる人物が登場する。作家と同様に、登場人物も近代の波及とともに日本各地に敷設されていき、人々の生活、感覚、思想や文化に大きな変化をもたらすことになる汽車に乗ってある土地へと移動し、その地で出会ったもの、体験したことを語る。ただし、このとき移動するのは旅人の身体だけではなく、身体に刻みこまれた日常や経験、習得してきた学問や学知、さらには通過してきた地で出会った物語なども動くのである。富永によれば、複数の経験、知識や物語を背負う登場人物が旅先の地に宿る物語と出会うとき、新たな物語が生れ、その新たな物語は怪異の形を取って表現されるという。

たとえば、『山海評判記』（1929年）では、能登半島を旅する主人公を襲う多種多様な怪異が描かれるが、これらの怪異は、東京から主人公の身体に載せられて、旅先に持ち込まれた民俗学という学知と、そして道中で聞いた唄や物語とが結び合うことで発生したものだという。さらに『古狢』（1931年）では、舞台の地名が明記されることなく、旅人が当地の伝承に触れたのを契機として道中における自らの不可思議な体験を語り、さらにある

女の悲劇の物語を聞く。その際、日本の広範囲で実際に伝わる「狢婆」とい伝承を盛り込む鏡花は、既視感のある、いかにもありそうな伝承を描くことで、読者が共有していると思われるイメージに触れ、作品のイメージと読者が持っている伝承・経験とが触れ合うことによって、読者が物語の生成に立ち会うことを可能にしている。鏡花が作品を書いた時代において、観光という新しい移動の実践や、民俗学という新しい知の実践が多様な地域の独自性を収集したいという欲望を背負って怪異の伝承を再発見し、怪異と伝承が「郷土」の独自性・ローカリティの象徴として再定義され始めた。ただし、鏡花作品で蓄積される怪異はこういった伝承とは異なる次元において、複数の土地や、そこに根差す価値観や習慣、信仰や物語などに結実するような、より普遍性のある物語として怪異が機能することになる。このような怪異のあり方は、鉄道が可能にする移動が作家・鏡花の想像力を刺激してはじめて成立する。移動の末に様々な物語が出会い結ばれた結果、旅人や当地の人を巻き込んで「怪異」が発生し、新たな物語として読者の前に現れるのである。

番匠報告

番匠健一は、「戦後北海道の開拓移住者と文学―玉井裕志「排根線」と「原野」の可能性」において、戦後北海道における道東開発と根釧パイロットファームの歴史経験を念頭に起きつつ、山田洋次監督の映画作品と、別海町在住の酪農家であり農民作家・玉井裕志の文学作品の比較検討から、道東の空間にうめ込まれた「移動」の経験について論じた。番匠は、山田の『家族』から『遥かなる山の呼び声』にかけての酪農家の描き方（酪農ユートピアから零細酪農家の離農へ）の変化に着目して、この変化にかかわった玉井裕志（酪農家、作家）の入植経験と文学活動、さらに山田の満州からの引揚げ経験、根釧パイロットファームで玉井が目の当たりにした開拓地の人々の移動（入植／離農＝離散）など、多様な「移動」の論点を照らしだした。

戦後、別海町・中標津町の位置する道東地域は、時代の脚光を浴び「新天地」といわれて入植者の増加をみた。こうした開拓・開発政策における「最後のフロンティア」というまなざしは、根釧パイロットファームや高度酪農集約地域における「酪農のユートピア」へと引き継がれる。こうしたまなざしは、文学や映画の表現にも現れ、「地平線」や「海霧」など内地とは異なるエキゾチックな特殊空間としての戦後の道東を描き出す。1970年の山田洋次の映画『家族』において、長崎県伊王島の小炭鉱の閉山にともなうカトリック炭鉱夫一家の中標津までの「移動」の物語は、道東＝欧米型酪農ユートピアというイメージを踏襲しているものの、移動の物語のなかに家族の故郷（root）と移動の経路（route）を書き込んでいることは興味深い。一方、『遥かなる山の呼び声』（1980年）では、内地で殺人を犯した逃亡者が中標津町の零細酪農家に住み込みをするという物語であるが、この場

所は彼にとっても、そして酪農を続ける母子にとっても安住できる「故郷」としては設定されず、土地から離れる「離散」へと向かう。酪農をめぐるこのような描き方の変化には、山田洋次の1969年に初めて中標津町・別海町を訪れて以降の、玉井裕志との出会が関わっている。北海道に美しい家族関係を求めてきた山田に対してその幻想を拒否して開墾地で営農することの厳しさを語る玉井。玉井からの批判を契機として、辺境にユートピアを求めるという自らの欲求に気づいた山田は、映画という手法で『故郷』(1972)、『幸福の黄色いハンカチ』(1977)、『遥かなる山の呼び声』(1980)、『男はつらいよ 知床慕情』(1987)などの作品でこの問題を展開する。

1970年前後は、1945年の日本帝国の崩壊に伴った多様なルートでの引揚げをめぐる語りが様々な媒体に現れる時期だが、山田も自らの満州からの引揚げ経験を活字にしている。興味深いのは、『家族』前後の北海道との出会いが、山田洋次の引揚げ経験の言語化と時期的に重なっていることである。故郷を持つ者に憧れる自分を語る「故郷を持たない」(植民地を故郷と言うことが許されない) 山田が、映画撮影を通じて「故郷」という概念そのものを通り抜け、異なる人の関係性を描き出すことへといたる映像作品上の変化には、上記の移動そのものの思想的とらえ返しが不可欠である。

玉井裕志も、両親が大正期の四国からの移住者であり、炭焼きで生計を立てながら釧路、標茶、弟子屈と移動を繰り返し、別海町の根釧パイロットファームへと入植している。玉井の膨大な作品群のほとんどはローカルな文芸サークルの雑誌に掲載されたものであり、入手が困難である。玉井は根釧パイロットファームで、多くの入植者が離散してしまう困難を傍らで見ながら、作品を執筆した。代表作の一つである「排根線」(1982) では、アメリカから輸入されたブルドーザーによって根こそぎ引っこ抜かれた樹木が開拓地の隅に寄せられてできた「排根線」に立ちむかう一人の老人、離散していくルーツを根こそぎにされた (排・根) 人々という離散者・離農者を同時に描く。そしてこのような文学作品による表現行為と、離農によって既に売り渡された農地に残る自身の開拓小屋を玉井裕志文学館として開くことは、根こそぎにされた開拓地を可能性に満ちた「原野」へと読み替える姿勢につながる。

3) コメントと全体討論

以上の報告に対して、辛島理人が総合的なコメントを行った。以下では、共同での議論の前提として辛島が提起した現状認識を確認したうえで、各報告に対するコメントと全体討論での議論を合わせて概観する。辛島によるコメントが多岐にわたったため、すべてを概観することができないが、ここでは後の全体討論でも登場する移動におけるオーセンテ

ィシティ（正統性）の問題と比較研究という方法の可能性に論点を絞ってコメントを概観する。

まず、議論の前提となる現状認識として辛島は、1990年代から2000年代初頭にかけての時期には、日本の諸地域に対して多元的な関心が社会的に広く共有されていたが、2010年代からは、社会的な関心は改めてグローバル都市に移りはじめたと指摘した。現に、たとえば東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催や大阪の万国博覧会誘致活動に見られるように、政治的・社会的な関心や諸々の資源がますますグローバル都市に集中しつつある。このよう状況の中で、各報告に見られたように、それぞれの報告者が多様な地域に対して多元的な関心をもって議論を共にすることの現代的な意義は、十分にあるだろうと考えられる。

そこで、グローバル都市をはじめとするメトロポリタン的空間と地方との格差が拡大する中でもう一度地域に対する多元的な関心を共有することの意義を踏まえたうえで、移動という観点から地域における文化実践をなお批判的に論じるため、辛島は、移動にかかわるオーセンティシティという問題と、比較という方法論の射程を提起した。以下では、この二つの事項を軸に展開された議論を概観する。

まず、猪岡・栗山と富永の報告に関して、辛島が移動とオーセンティシティの関連からコメントをした。辛島の整理によれば、猪岡と栗山の報告では、移動するモノをめぐって生じるある種のオーセンティシティの再発見や価値の移動と付与に焦点が当てられていたという。これに対して辛島は、人やモノの移動と、移動したモノをめぐるオーセンティシティや価値の発見・付与とが同時的に並行して行われるわけではなく、むしろ両者の間に往々にしてズレが存在すると指摘しつつ、そうしたズレに着目することから、研究のさらなる展開が可能であると示唆した。

さらに、富永報告に対して、文化の実践における人やモノの移動とオーセンティシティとの関係を問うことで近代を論じることの可能性に触れた。ハルトゥーニアン（Harry Harootunian）が論じたように、激しい変化の社会として経験される近代において、変わらない（とされる）ものこそがオーセンティックで価値あるものとして再発見される（Harootunian 2000）。同じように鏡花作品では、近代的な移動の媒体である鉄道を利用して旅する主人公の物語が怪異を変わらぬものとして発見していく側面を持っているといえる。

最後に辛島は、移動するモノやこれらが媒介する文化に新たな価値が付与される場合と、反対に価値が減少する場合があることに留意しつつ、移動するモノに対して価値を付与する主体のポジショナリティを問題化する視点から、具体的な事例を通して文化研究のダイナミズムを論じる可能性に触れた。そして文化の実践における移動とオーセンティシティ

の関係という問題は、全体討論でも引き受けられてさらに展開された。

さらに、西田報告や番匠報告に対して、辛島が「比較」という方法と、自身の専門領域のひとつである日米関係史の問題を引き合いにしつつコメントをした。まず西田報告に対しては、『アンクル・トムの小屋』の日本語翻訳と同作品の日本での受容を日米関係の歴史から考えた際、人種間戦争、有色人種を解放するための戦争という大義名分を持ったアジア・太平洋戦争期において、同作品の受容と解釈、さらにはアジアに対する文化プロパガンダの文脈でさらなる研究の可能性を指摘した。また番匠報告に関しては、北海道における開拓計画のトランスナショナルな比較の対象として、満州、オーストラリアや米国をつなげる開拓や都市計画の連続、さらには米国の介入によって朝鮮戦争後において北海道に導入される農業機械がブルドーザーなどの軍事技術から転用されたものであったなどの方向性を提案した。

上記のコメントからの流れを引き受けてフロアからも多数の意見が寄せられ、報告者との議論が行なわれた。紙幅も限られており、そうした議論の全貌を書き記すことはできないが、以下ではいくつかコメントと指摘を紹介したい。

副田賢二（防衛大学校）は、フィルドワークとテクスト分析という二つの方法論を架橋する視座として移動の問題を位置づけると同時に、移動とオーセンティシティの関係を論じる研究には二つの展開の方向性があると指摘した。ひとつは、テクストに刻まれた、またはフィールドの現場に存在する母国語的な共同性というオーセンティックなものに没入していく研究のあり方であり、今もうひとつは、テクストと現場の実践から母国語的共同性を切り離し、共同性から逸脱していくあり方であるという。副田は、たとえば西田報告で論じられた翻訳というものは、母国語の共同性を相対化させ、さらには反転化させる方法の一つだと述べる。このように、移動とオーセンティシティの関係を問う際のこういった二通りのあり方は、近代における移動のダイナミズムから生じる、とのことである。

これに対して西田は、日本語文学において物語を語る声は果たして標準語であるべきかどうかをめぐる議論に触れつつ、小説に登場する黒人の話す南部訛りを翻訳する際に東北方言や関西方言を想起させる表現や口調が採用されることを紹介した。文学作品における意味の伝達における標準語の特権的な地位は、まさに翻訳を通して問われているひとつの例だろう。

さらに、この議論の延長線において、栗山は、今後の研究の方向性として、継承された三線とは反対に、誰に渡ったのか分からずに行方不明になってしまった三線、または廃棄されたしまった三線を追うという課題を改めて認識した。そうすることによって、価値ないしオーセンティシティを付与された楽器が、沖縄から外部へ渡った後再び沖縄へ還流する、という図式とは異なる議論の展開ができるだろうと栗山は自身のさらなる課題を語っ

た。

大道晴香（國學院大學）は、東北地方の民間宗教者である「イタコ」表象の形成と民俗文化の変容に関する自らの研究に沿って、マスメディアを通してイタコの表象が現地から全国の人々のなかに浸透していくなかで、そうした表象が再び現地に持ち込まれ民俗文化が変容する過程に言及し、フィルドワークとテクスト分析という二つの方法論を架橋する一つの研究事例を具体的に紹介した。そこで、人やモノが動くとき、テクストによって媒介される表象や物語が新たな空間で再解釈・再文脈化され新しい表象と物語が生まれる、そして新たな空間を得たモノが新たな価値を付与されるなど、文化の活性化装置としての移動のあり方を浮き彫りにすることが可能になるという。

ただし、番匠が疑問を呈したように、近代において移動が意味の活性化や再想像の契機となるとき、そこにはどのような再想像の力学が働くか、という問題は常にあるだろう。移動に注目することによって、最終的には国土ないし母国、そして母国語に帰るべきとする力学を批判的に検討しつつ、オーセンティックな場所が発する磁力からいかに外れた論理に出会っていけるかというところに、移動をめぐる研究の大きな課題がある。

その他のコメント

上に述べた議論の他にも、シンポジウムの参加者から、各自のディシプリンや研究対象を踏まえた示唆的なコメントが数多くなされた。紙幅の関係ですべてを紹介することはできないが、以下では、その中からいくつか取り上げて、全体討論の様子を確認する。

黛友明（神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者）は、猪岡、栗山と富永の報告を引き合いに出しながら、人とモノの移動の中で生じる伝承やフォークロアの変容と、日常的な実践が帯びる歴史性との緊張関係に関してコメントをした。まず、1980年代から90年代にかけての民俗学で起こった転換を確認しつつ、伝承・フォークロアを固定的なものとするのではなく、人間関係をはじめとする、フォークロアが継承される現場の文脈とあり方に大きく影響されるものとして捉えることの必要性を指摘した。そうした意味で、猪岡が報告においてミクロなレベルで明らかにした、人とモノの移動が媒介する伝承の捉え方の妥当性を十分に認識しつつも、一方では何らかの歴史性を帯びた人々の日常実践の連続性の側面を浮き彫りにさせるような、つまり特定の現場において、移動するモノを媒介にある世代の主体が別の世代の主体へ伝承・フォークロアが渡される際の連続性と不連続性が絡まった日常実践の歴史に着目するという、更なる議論の転換の方向性を提起した。「引きずってくれるものが歴史の中にある」という感覚から、人やモノが移動するなかで体験される歴史的時間の重層性や断絶の側面を捉えるための視座があるだろう。この意味

において、鈴木彩（慶應義塾大学大学院）が指摘したように、鏡花作品における怪異は果たして前近代／近代という二項対立から理解されるべきかどうか、という疑問も重要である。

さらに、ファクンド・ガラシーノ（大阪大学大学院）は、移動を語る研究者自身の移動のあり方に目を向けるという問題意識から、研究者自身の移動の軌跡に注目することによって、移動のリアリティをどのようにして語れるか、という質問をした。つまり、大学や学会などのアカデミアに身を置く研究者が複数のフィールドやテクストを移動しつつ、対象となる事象や主体と同じ足跡を研究者がたどることが可能なのか、またその必要性はあるのか、ということである。

この問いに対して、栗山は、三線の演奏者がきっかけで研究を始めた、演奏と研究という二つのフィールドの間を移動しながら調査を行う、聞き取りした方々とはほとんど一緒に演奏をしたり、三線を通した交流をしたり、人間関係を築いていくなかで語りを聞き出せていることがある、実技をやるときに得た経験を、研究の中で再発見するという方法に出会えたという。

西田は、文学テクストを中心に研究を行うことは、一見して研究者自身がさほど動かなくても済むように想像されるが、実はテクスト自体が空間と時代を越境して、アーカイブに集まるという状況が存在することを浮き彫りにさせた。

猪岡は、フィルドワークを行うなかで、その現場に移動してきた人としての自分を意識する経験を語った。そこでは、調査者としての自身が語り手に生年月日などという普段意識されない当たり前のことを聞くことから聞き取りを始めることで、外部から参入してきた自身が前提を共有していない状況を認識しつつも、会話を進めることにつれて、相手と新しい関係を築くという自らのフィールドでの体験を話した。

富永は、作品の舞台になった土地にいくとで、普遍性を持っていたはずの文学テクストが一気に具体性を帯びて、それまでになかった作品の読み方が開かれるという経験を語った。

番匠は、研究者は資料が集中して所蔵されている中央にしか行かないことを指摘して、辛島のコメントで問題化されたメトロポリス中心主義批判を、研究活動における「移動」の実践に問いを改めて向けた。中央ですでに整理され秩序立てられた資料＝知ではなく、資料＝知の淵（国民国家の周辺に関係する）へと足を運ぶ移動実践においてのみ可能となる出会いや知の形態が求められる。それは資料と情報が集中するメトロポリタンな空間への「移動」から抜け出すことで、異なる視座を獲得すると同時に、そうした研究者自身の移動と、移動の過程のなかで行われる資料の収集と作成の過程を記述に組み込んだ研究のあり方を人文学でどのようにして進められるか、という問題を提起した。

4）おわりに代えて：シンポジウムを振り返りながら

上に述べたように、本シンポジウムでは、「移動」というカテゴリーの含蓄、評価の方向性やそれが持つリアリティは、それぞれの参加者によって異なったため、移動をめぐって統一見解や意義をまとめることを目指さなかった。また、専門分野やディシプリンを互いに異にし、研究テーマに関する基本的な知識や認識が共有されていない中での議論は、多少の誤解やディスコミュニケーションもあったかもしれない。しかし、それぞれが背負う問題意識や研究上の文脈のズレから生じるノイズは、研究対象を捉えるための視座や方法論だけでなく、研究対象とする事象、問題、出来事、モノや人びととの関係とこれらに対する姿勢を新たな観点から見直す契機になったと確信している。

本稿を締めくくるにあたって、このシンポジウムの実現のため、様々な形で協力して、支援して下さった方々に心より感謝の念を申し上げたい。シンポジウムの趣旨がまだ曖昧な中でも研究報告を快く引き受けて下さった報告者の皆さん、多忙な中でコメントを快諾して下さった辛島先生、司会を努めて下さった茂木さん、そして半年にわたる準備期間を通して奔走してくださった東西若手研究者交流シンポジウム準備委員会の皆さんに謝意を評したい。さらに、当日会場へお越ししていただいた皆さんや、コメントや指摘をしていただいたにもかかわらず紙幅の関係で言及できなかった方々にもお礼を述べたい。参加者の積極的な関わりがなければ、学際的な議論を共にするという本シンポジウムの目的が達成できなかったことに改めて気づかされる。そして最後に、日本学研究室の皆さんや、この企画が実現するようにサポートして下さった先生方やスタッフの方々に心より感謝の念を申し上げたい。

参考文献

伊豫谷登士翁 編『移動という経験　日本における「移民」研究の課題』有信堂高文社、2013

Harootunian, Harry, *Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan*, Princeton（N.J）, Princeton University Press, 2000

Sheller, Mimi; Urry, John, “The New Mobilities Paradigm”, *Environment and Planning A: Economy and Spaces*, vol. 38, 2006, pp. 207-226

Urry, John, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century*, International Library of Sociology, London; New York, Routledge, 2000